

# 制度変革期における産学連携の 実証研究：東京大学教員に対する 質問票調査の結果の分析

第5回産学連携推進会議  
2006年6月

馬場靖憲(東京大学先端科学技術研究センター)  
矢崎敬人(工学院大学グローバルエンジニアリング学部)

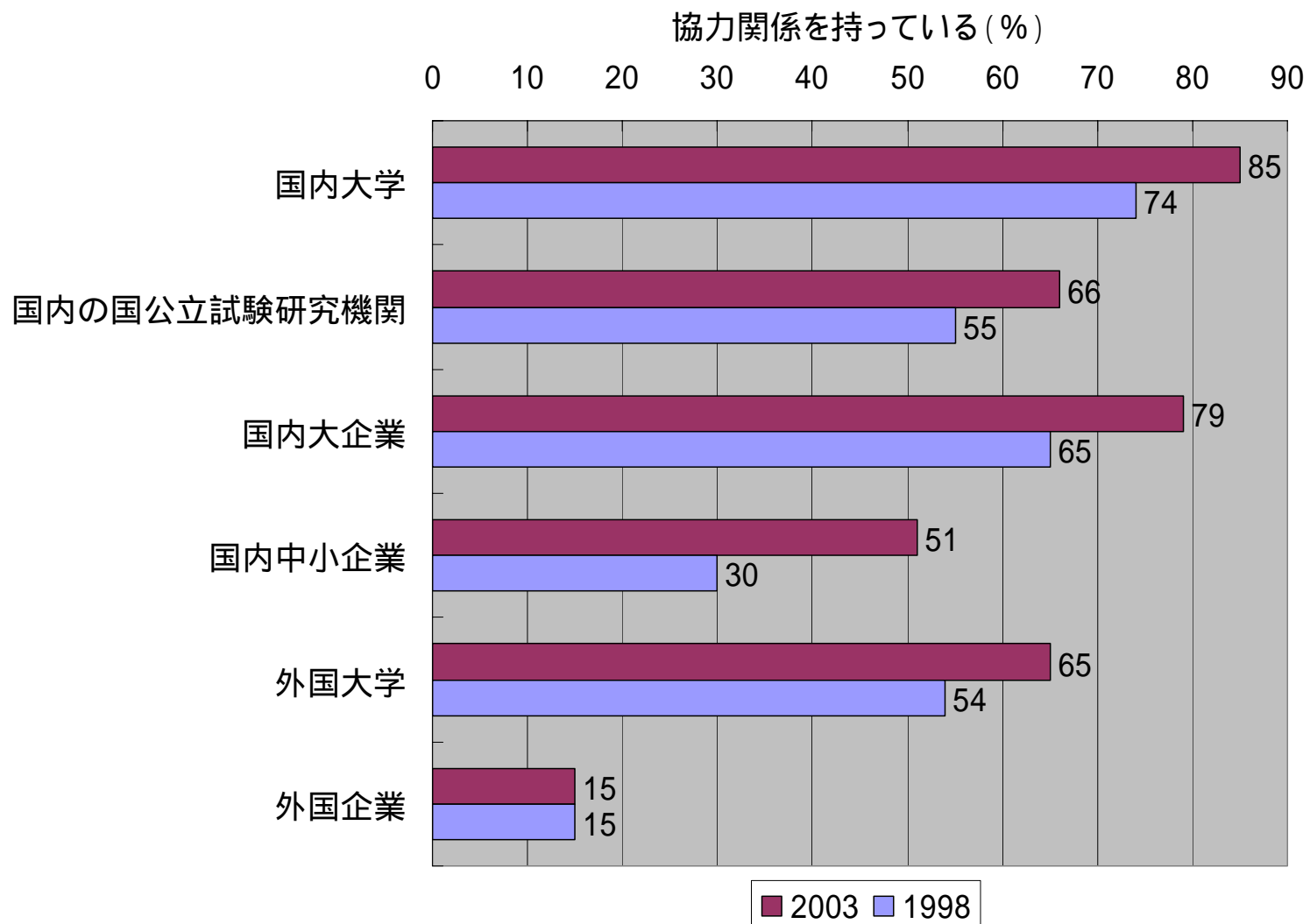
# はじめに

- 日本の大学を取り巻く環境は1990年代終盤から2000年代半ばにかけて大きく変化した。
- 工学系、医薬系の大学教員の研究活動と産業との協力関係の実態と、制度変革期を通じた変化を探るために、東京大学(全数)、他大学(サンプル)の工学系、医薬系教員に対して質問票調査を行った。
- 本日は、このうち東京大学教員を対象とした調査の結果から報告する。

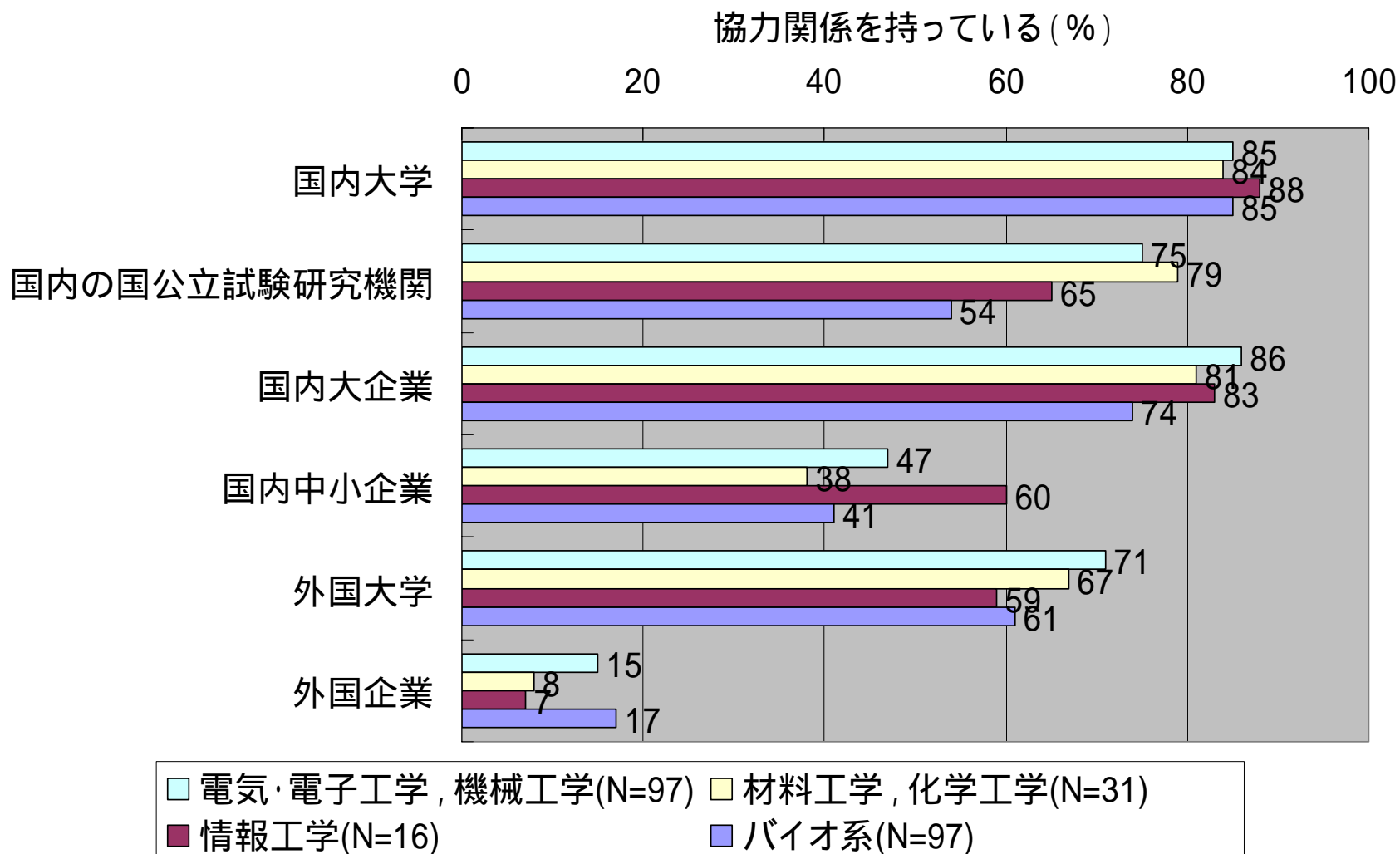
# データ

- **対象：工学系、医薬系の教授、助教授（特任含む）。**
  - 工学系：工学系研究科、先端研、生産研、人工物工学研究センター。2003年度秋～春に実施。
  - 医薬系：医学研究科、薬学研究科、医科研。2004年度に実施。
  - 715名に送付し、402名から回答を得た（回答率56%）。
- **教員による論文公刊についてのデータはISI Web of Science データベースのデータで補完した。**

# 他機関の研究者たちとの研究上の協力関係 (1998, 2003)

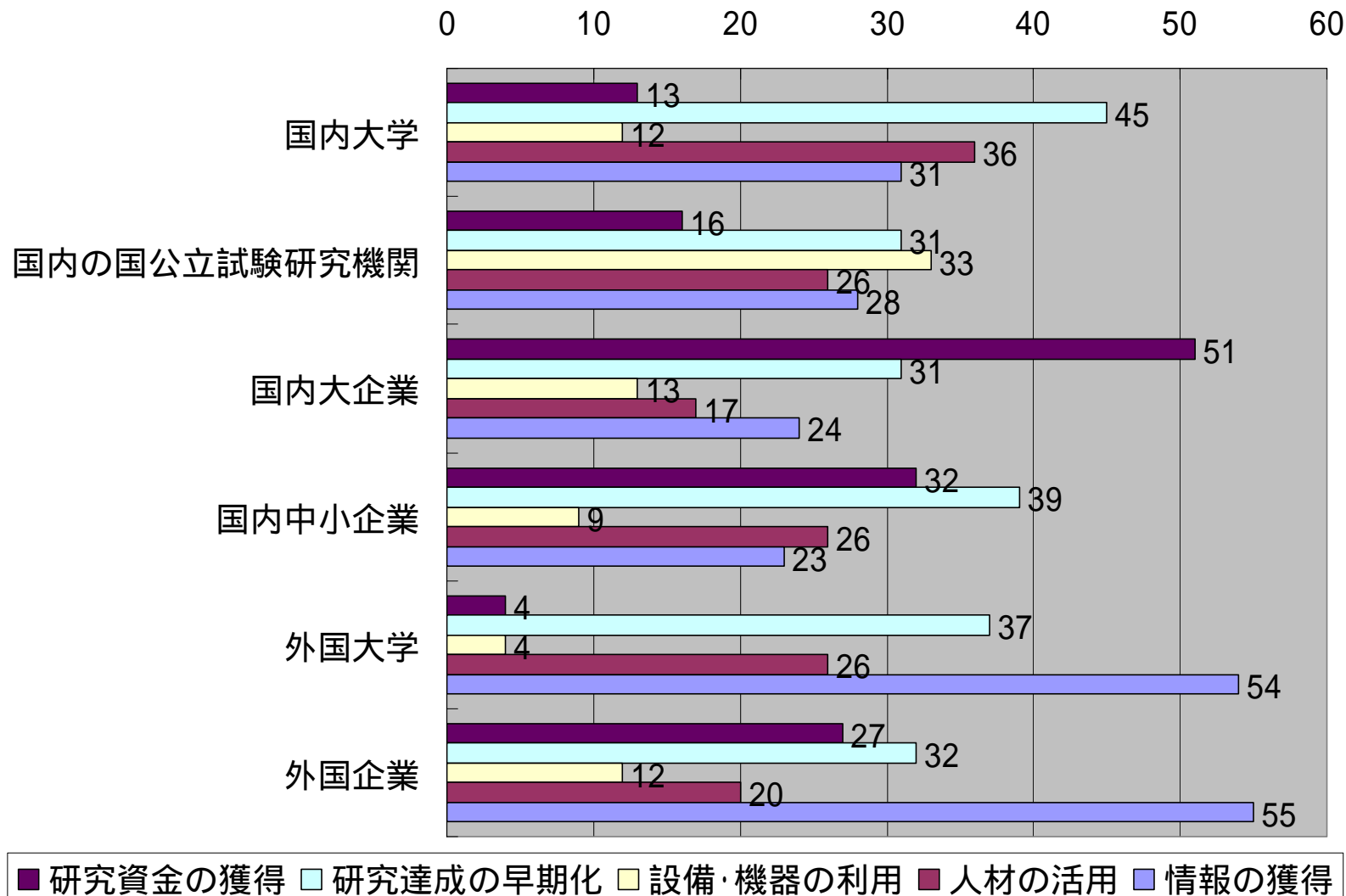


# 他機関の研究者たちとの研究上の協力関係，研究分野ごとの集計(2003)

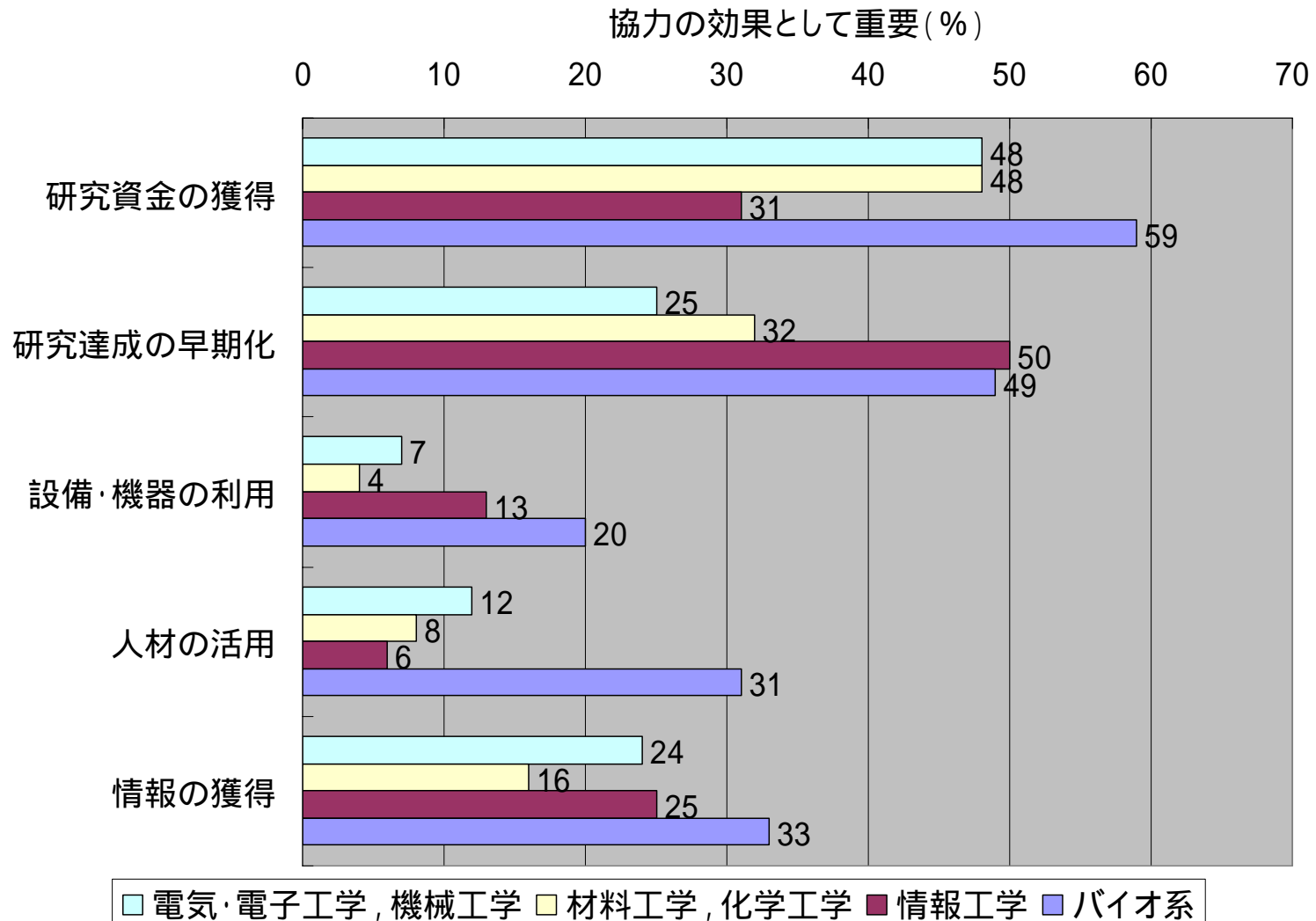


# 協力相手別の協力関係の効果

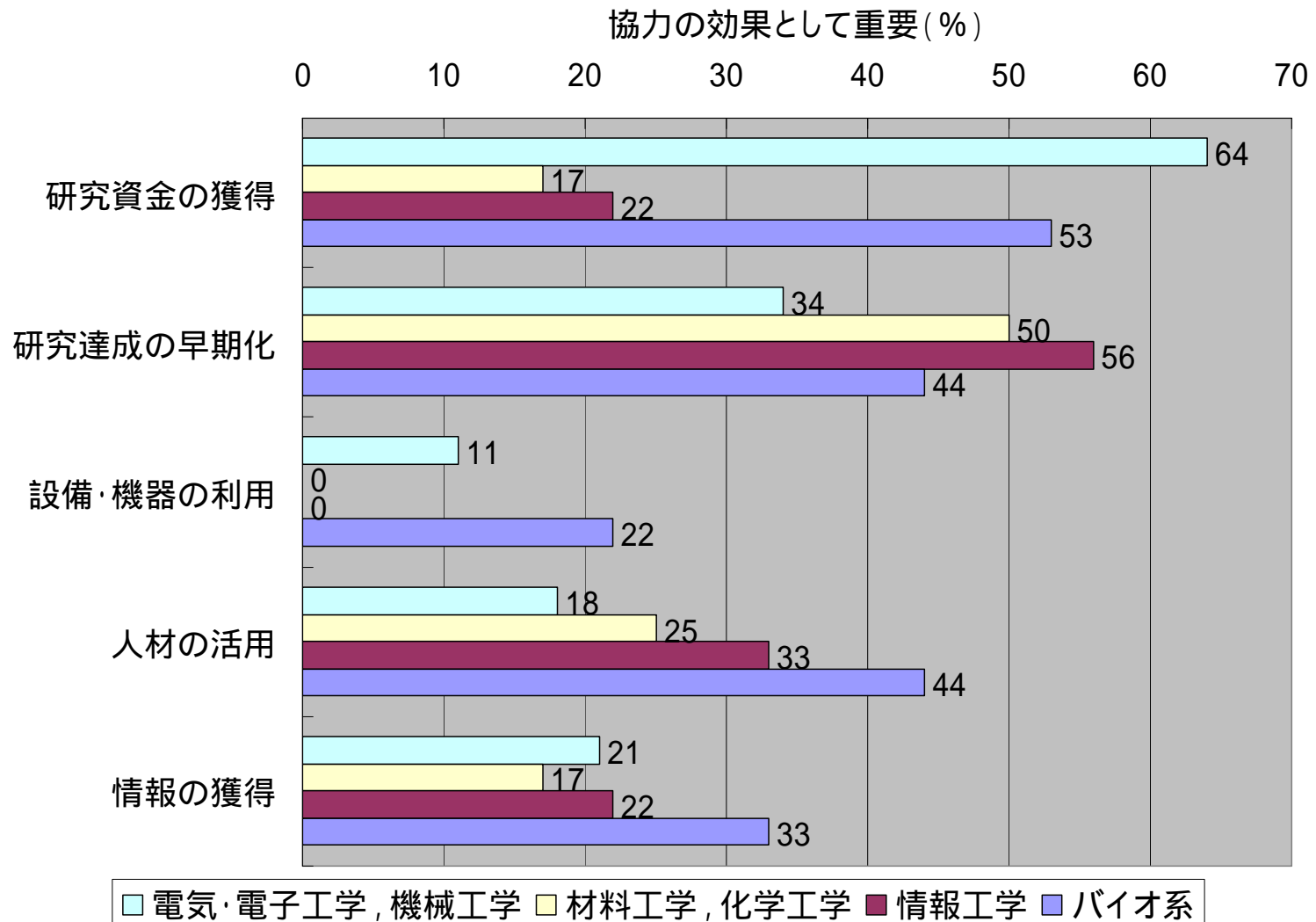
協力の効果として重要(%)



# 国内大企業との協力の効果，研究分野ごとの集計

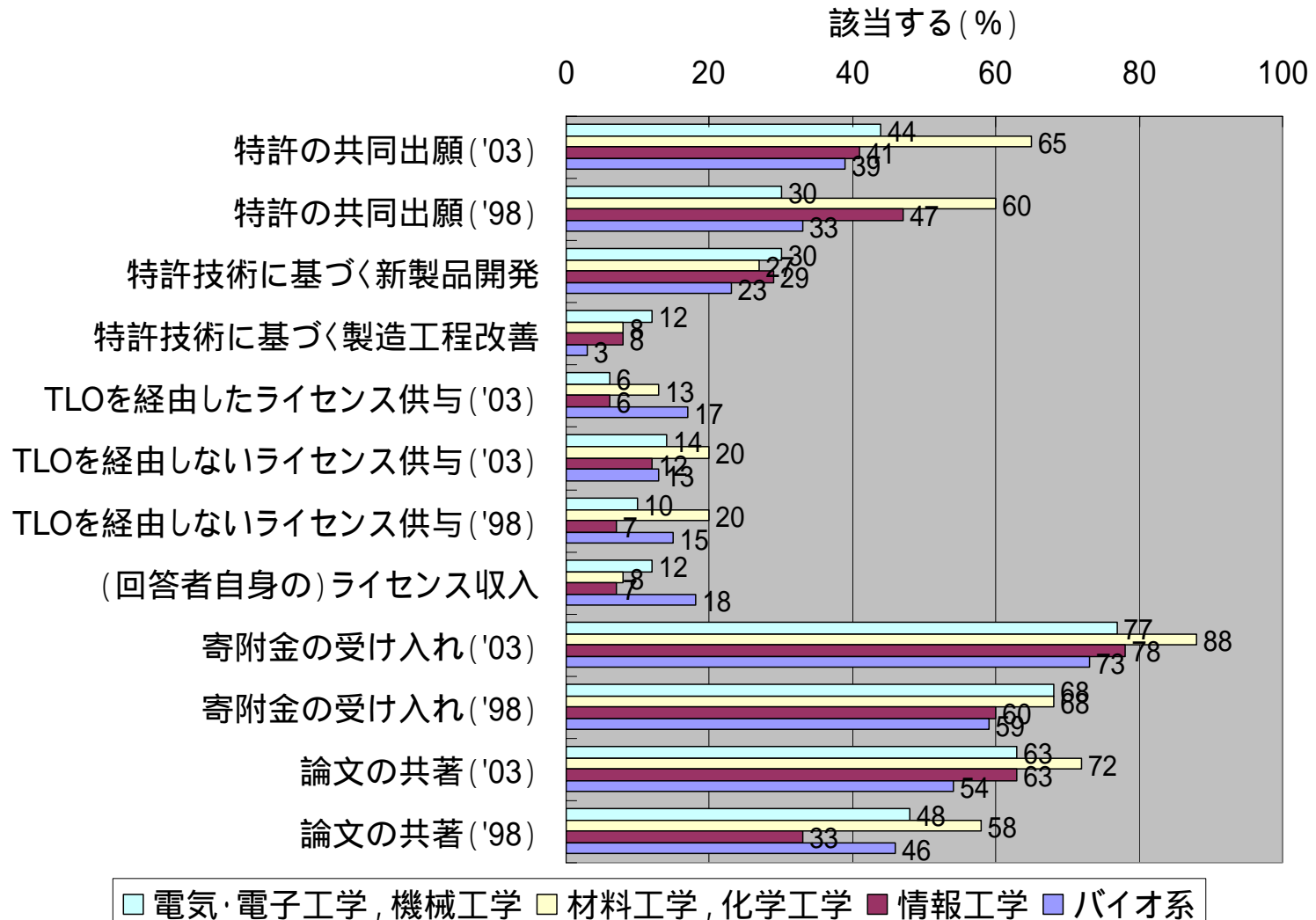


# 国内中小企業との協力の効果，研究分野ごとの集計

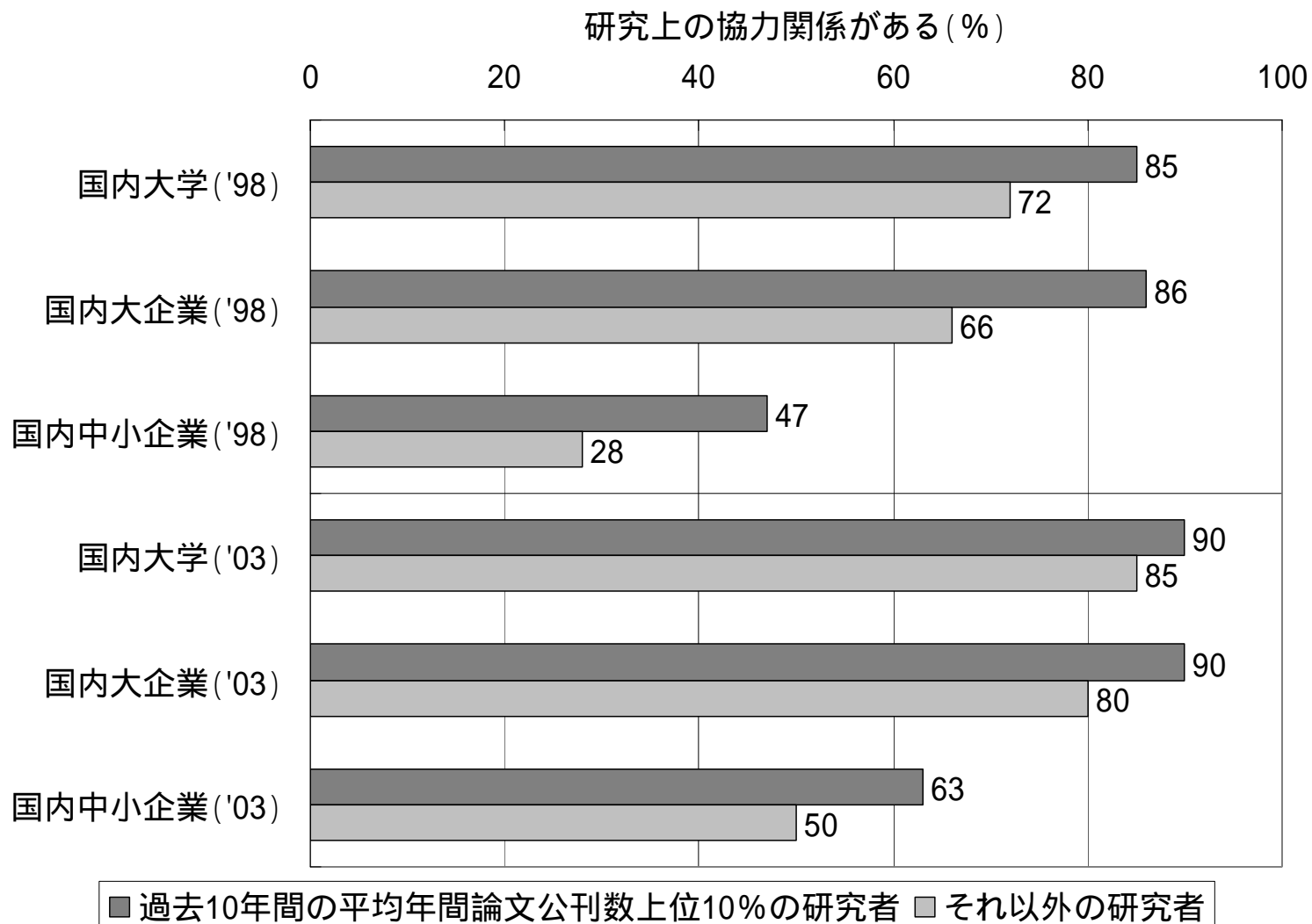




# 研究者による商業的活動等，研究分野ごとの集計(1998, 2003)

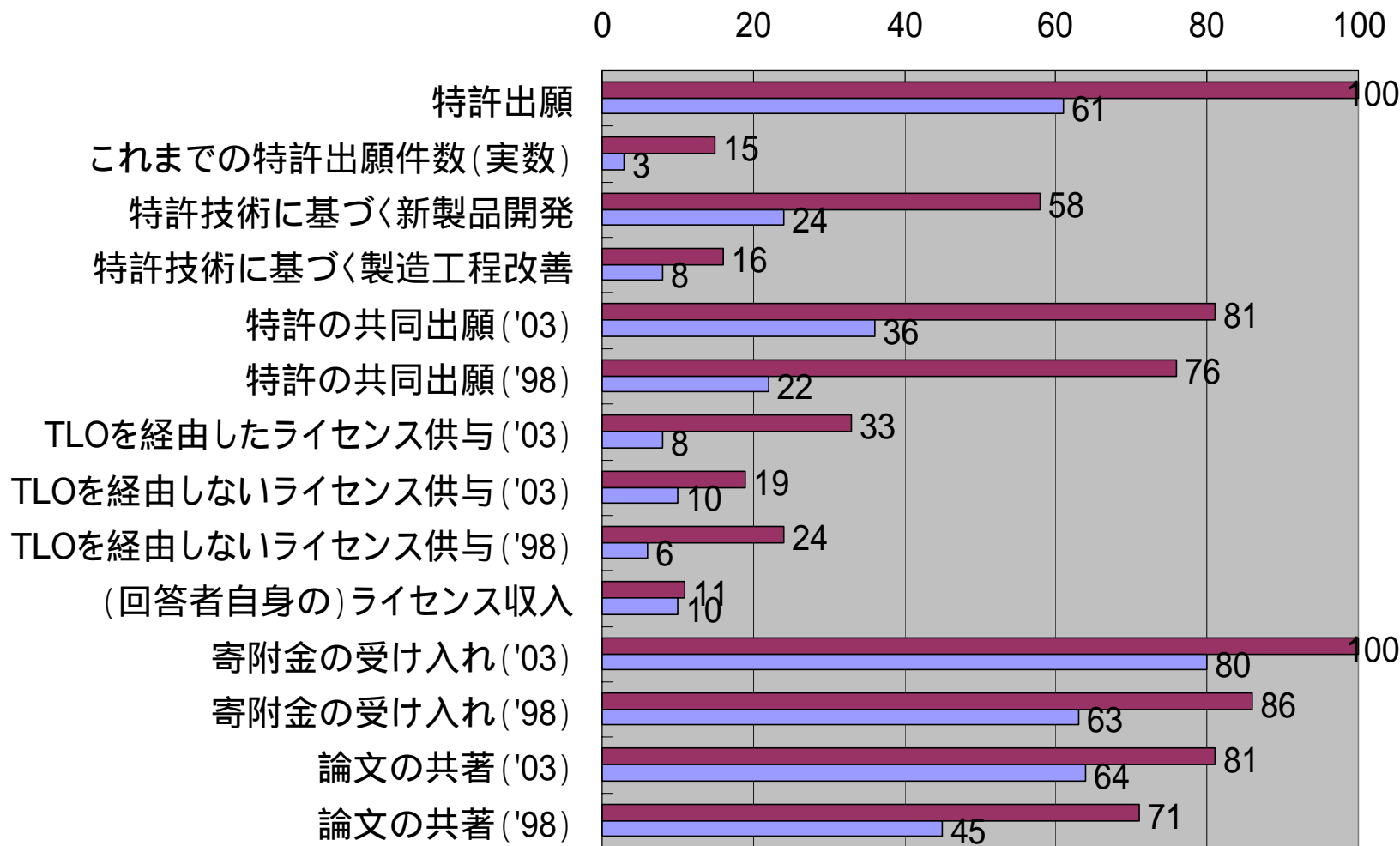


# スター研究者とそれ以外：論文公刊活動と企業等との協力関係(1998, 2003)



# スター研究者とそれ以外：研究者による商業的活動等 (1998, 2003)

該当する (%)

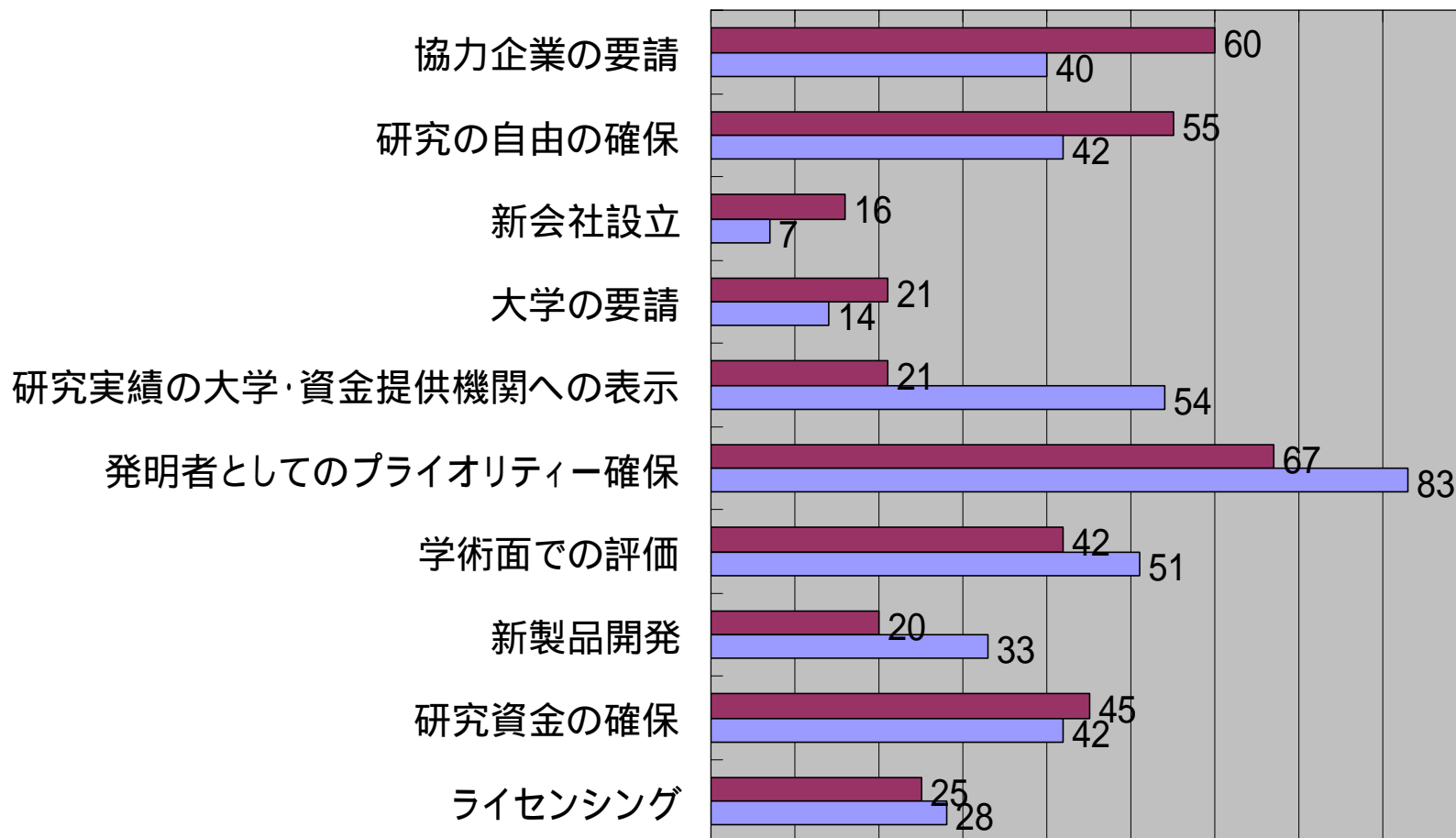


■ 過去10年間の平均年間論文公刊数上位10%の研究者 ■ それ以外の研究者

# スター研究者とそれ以外：特許出願の理由

5段階スケールで「重要」または「極めて重要」 (%)

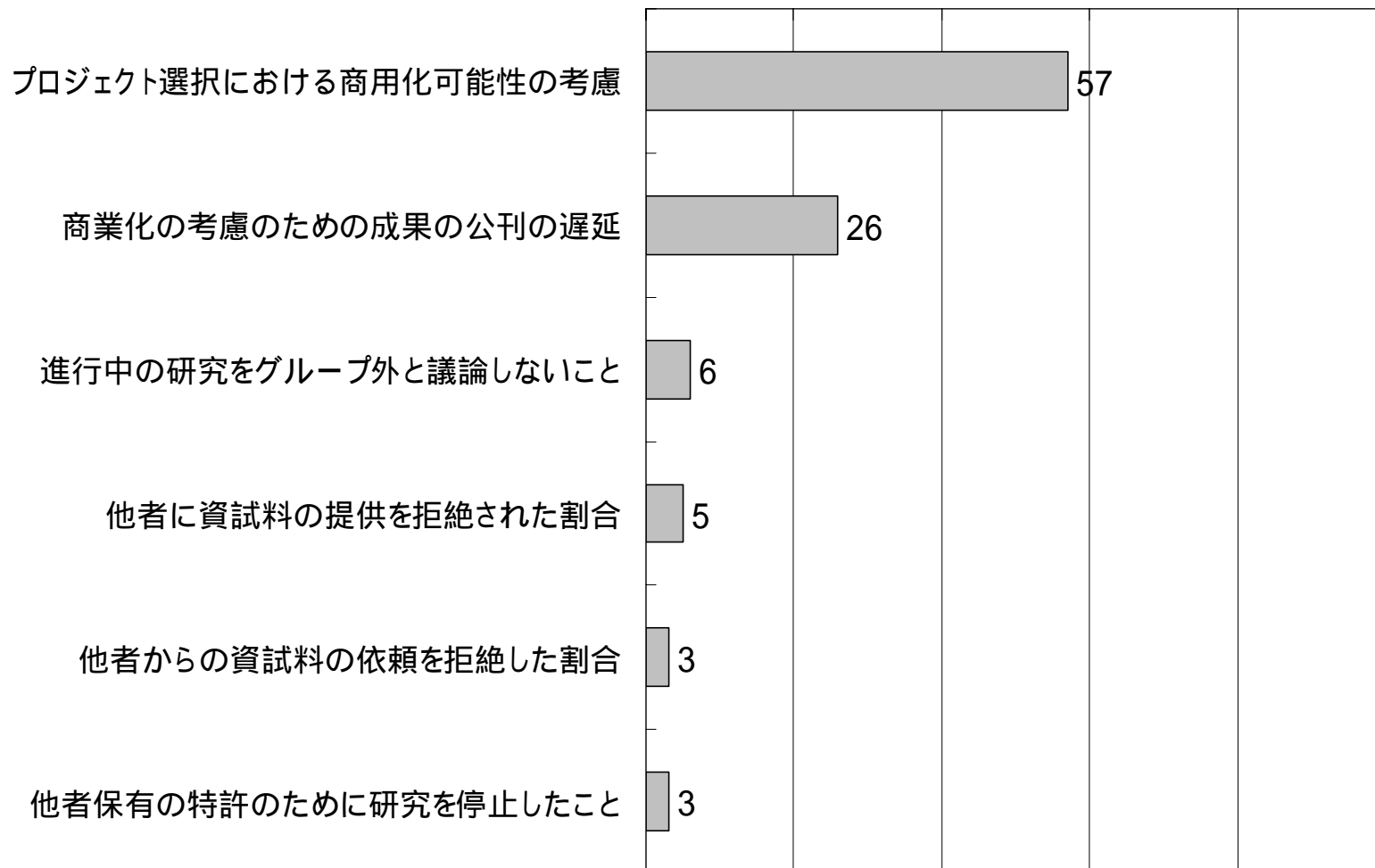
0 10 20 30 40 50 60 70 80 90



■ 過去10年間の平均年間論文公刊数上位10%の研究者 ■ それ以外の研究者

# 研究活動の変化(1998-2003)

5段階スケールで「増加」または「大きく増加」(%)  
0 20 40 60 80 100



# 結語

- 「制度化された技術移転の促進」という制度変革の目的は一定程度達せられている。
- 中小企業との関係が拡大していることは注目に値する。
- ただし、制度変革による新しい制度化された産学連携の役割は、以前からの制度化されていないインフォーマルな形を取る技術移転を置き換えるものとはなっていない。
- 制度変革がオープンさをもっとも重要な特徴とするパブリック・サイエンスや教育のあり方に与えている影響についてはより詳細な分析を必要とする。

# 文献

- 詳細については下記を参照のこと。
  - 馬場靖憲、J.P. Walsh、矢崎敬人、鈴木潤、後藤晃(2005)「制度変革期における産学連携：東京大学教官への質問票調査の結果」『科学』75(10)、1199-1203ページ。
  - 馬場靖憲、後藤晃(編著)『産学連携の実証研究』東京大学出版会、2006年出版予定。